

丸の内キッズフェスタ 2008 協賛

「大人のための楽つみ木広場」シンポジウム&ワークショップ

～大人も積み木で童心を取り戻し、語り合おう「未来の子供の心の環境」～



■シンポジウム次第

■日時：平成20年8月11日（月） 15：00～18：00

■場所：東京国際フォーラム ガラス棟 7階イベントスペース（入場無料）

■対象：大人、地域活動、社会教育関係者、子育てサポート、幼稚園、保育園、小中学校関係者、社会貢献企業関係者

■形式：積み木シンポジウムと大人の積み木ワークショップ

■積み木シンポジウム

パネリスト 辰濃 和男氏（元朝日新聞天声人語担当、日本エッセイスト協会理事）

パネリスト 恵良 隆二氏（三菱地所株式会社丸の内ブランド開発企画部長）

パネリスト 荻野 雅之氏（株式会社木楽舎代表）

コーディネーター 佐治真規子氏

■テーマ 「大人の生きる力と積み木」

ラジオ放送キャスターの佐治真規子氏の司会で、パネル討論を行い、積み木による子どもたち、そして大人の新しい遊びと学びの可能性を、会場の参加者の皆さんもまじえて討議しました。また、全国各地で積み木教育を実践されている方々の実践発表や意見交換が行われ、楽つみ木広場が幼稚園や学校教育、地域の子育て支援、さらに病院で長期闘病している子どもたちの療養にも効果を上げていることが報告されました。

その後、会場の参加者全員で楽つみ木広場のワークショップを楽しく体験しました。

会場では、全国で行われている楽つみ木広場のようがパネルで発表されました。

■ どうして楽つみ木は始まったか

荻野

もともと家具職人として、八ヶ岳清里のポール・ラッシュ祭で家具を展示していたが、うちの子も会場で一緒に遊べるようにと積木をはじめたのが本当の理由。平成8年のことだった。家族の絆を取り返すためだった。そしたら、私の家具を見にくる人よりも、積木のテーブルに張り付いた子どもたちの数の方が多くなってしまった。こんな積木に、どうして子どもたちはこころを奪われるのか、子どもがなぜ積み木に執着するか、考え込んでしまった。積み木は子供の心をはぐくむのに効果があるのではと、みんなで遊ぶための楽積み木の制作を開始したのが10年前だった。

しかし、この積み木がなければ、みなさんとお会いすることもなかった。一昨年は、ロンドンまで積み木に連れて行ってもらった。こうして全国積み木シンポジウムも開催され、10年やって感慨はある。

積み木はどうして面白いのか、ある子に聞いたら、崩れるから楽しいと。その子はレゴが好きな子だったが、「レゴは崩れないけど、積み木は崩れるから楽しい。積み木は2度と同じことができない」とも言った。私は、物づくりの神髄をその子に教えてもらった。

■ 楽つみ木との出会い

辰野

最初に荻野さんに取材で伺ったのは7,8年前。東京の丸ビルを支えた松杭を使いベンチを作ると聞いて、取材に伺った。ところが話を聞くと、ベンチより積木を作る方が面白いと言われ、記事にした。それからあれよ、あれよと楽つみ木が全国に広がっていった。

私は、この積み木運動は、私たちの支えるという無意識の心の働きから来ているのではないかと思う。元が丸ビルを80年間地下で支えた材木を積み木にしたのがオリジナル。誰かが支えないと楽つみ木はここまでこれなかったのではないか。



恵良

2000年8月9日、朝日新聞の天声人語に丸ビルの松杭の話が掲載され、それを見て、荻野さんがわたしのところにやってきた。

丸ビルを立て直すことになり、ビルを支えた地下の松杭は、80年以上水に浸かっていたのが、研究用に引き抜いてみると良い香りがした。丸ビルは、1923年関東大震災の年に出来た。その基礎を支えた松杭は北米産で5433本を使った。長さが15m、直径がおよそ30cmほどもあり、当時最新のスチールハンマーで、一日50-60本打ちこんでいった。それから地下15mでビルの基礎を支え続けてきた。

その当時私は、丸ビルの建て直しで不要になった松杭をゼロエミッション(※)でリサイクルすることを考えていたが、私のところにやってきた荻野さんは、松杭を「リサイクル」再利用ではなく、「リボン」で生まれ変わりをさせるんだと言われた。そして、松杭から丸の内のビジネス街に置くベンチと楽積み木が作られた。実際には松杭ベンチは雨風で朽ちて取り替えることになっているが、積み木の方は今日も元気に子供たちに遊んでもらっているのです、よかったと思っている。

(※ゼロエミッションとは、国連大学が提唱し、産業から排出される廃棄物や副産物が、他の産業の資源として活用され、全体としていかなる形の廃棄物を生み出さない統合化された生産を目指そうとするプロジェクト。)



荻野

リボーン（再生）はものづくりの人間なら、どうしてもこだわる問題。資源の有効活用のために使い終わったモノを再利用するだけでなく、積極的に新しい命を与えたいという気持ちで、丸ビルの松杭をリボーンさせてもらった。おばあちゃんの着物を新しい着物に作り替えるのはリユースでなくリボーン。そこに物を大切に作る、資源を大切に作る日本のこころの働きがあるのではないか。

しばらく前、ワイン工場の大きな樽を手に入れて、家具に再生したことがある。昔のワイン工場では7000Lの大きな樽で熟成していた。工場を見学したときに放置されていた樽を見て、工場長に物を大切にしていないじゃないか、と言ったら、「もうワインづくりは終わったからいいんだ」というので、私は「でも、まだ樽は生きていないか」と、もらい受け、これを家具に再生した。過去の物が技術により、新しい命を宿して今の時代によみがえる。そういうことを大事にしたい。

■大人に楽つみ木を楽しんでもらう理由は

辰野

積み木をやって楽しいのは子供だけでない。（楽つみ木の）この三種の形は天才的な発明だ。親がやっても楽しい。

今の時代、自殺者が年間三万人もの時代、だれが鬱になってもおかしくない時代。日本の社会はひどい状態になっている。四国のお遍路さんの道をいくと、たくさんの方が癒しを求めて歩いている。

そういうなかで、積み木広場はこころの療法になるのではと思っている

その面白さを生んでいるのは、積み木に三種の形があることで、大人の想像力を膨らませることができる。

リボーンでは、「積み木で森の再生」ということを、8年前（平成12年）私が最初に出会ったときに、荻野さんは言っていた。

今山が荒れていますね。このため洪水や土砂崩れがおきており、森の再生は、国家的大事業になる。荻野さんが間伐材で積み木を作り、森を守ってリボーンさせようということを聞いて、すばらしい洞察力をもった人だと思った。間伐材が活用されれば、山が守られ、リボーンされる。そのことを考えさせてくれる楽つみ木広場は、子どもにも大人にもどんどん広がってほしい。

荻野

子供と積み木の関係だけでは、閉鎖的かなと思った。大人の保護者にも積み木の変化の時間軸を見てもらいたい。楽つみ木広場では、初めどうしていいか分からず、ガチガチの子供たちがやがて、生き生きとして壊れた積み木橋の修理屋さんや配達屋さんが出てきたりする。それを見たお母さん方から「たかが積木、されど積木だった」という感想が多かった。

積み木から学ぶことが多い。ある小学校では、お父さんの企画で積み木広場が開かれ、終わった後に飲み会があって、三時間積み木の話ばかりで盛り上がった。それを見て、「大人の積み木」という構想が生まれた。

■ 積み木広場の広がりの可能性

荻野

楽積み木広場の新たな可能性では、大学病院の看護プログラムに採用されていることを報告したい。

山梨大医学部附属病院の小児科病棟で、医局の先生がたから「長期入院の子どもたちを対象に楽積み木広場を」と声をかけていただいた。積み木が子供病院で活用できると思っていたので、病院が木楽舎の工房に近いこともあり、さっそく積み木を持ってうかがった。

病院では、難病をかかえている子たちを治療するとき、子供たちが先生方にこころを閉ざしてしまうことがあり、どうしたらよいのか課題になっていたようで、積み木広場のワークショップを試してみるようになった。

そこでは、子供と先生と一緒に積み木をつんでいる。一生懸命積んでいる。積み木になると子供の方が上手で、先生におしえている。そこでは先生と子供がフラットな、いい関係になっていた。

元気な子と、痛みを感じている子たちとでは積み木への向かい方が違う。病院の子たちは、ワークショップで最後の積み木崩しのときでも大事そうに「崩してごめんね」と話しかけている。それを見て、私たち木楽舎では「この仕事だけはボランティアでやろう」と心に誓っている。



恵良

この積み木は子どもたちのコミュニケーションの媒体になっていると思う。手にやさしく、面取りして気配りしているのも大事な点。山の間伐材で作るので、里山の生活がそこにあり、積み木が都会の生活をつなぐきっかけになるのではないかな。

実は私の家にも楽積み木があって、時々楽しんでいる。私はビジネスマンだから、積み木を手にとると、出来るだけ高く積もうとしてしまう。ところが、この会場へきてみると、積み木広場では参加者は平面で花とか橋とか、つなぐことを大事にしている。

辰野

私も会社勤めをしているが、高い地位にいかなかったので、私が積むと横に広がってしまう。積み木をすると性格が出てくるのが面白い。

それにこの積み木広場では、参加者がお互いが支えあっていて、一緒にやっているうちに、いい関係が出来てくるのも面白い。

一つでは存在しないのが積み木。家庭でも積み木のようにお父さん、お母さんが支えあっているのをみると、子どもが安心できる。

積み木広場では、積み木が支えあって出来ているのと、会場全体の一つ一つがつながって、最後にガウディが出現するのはびっくりした。

荻野

恵良さんにお伺いしたい。積み木はブロックだが、これで建築のイロハを遊ぶことができるか。

恵良

積み木では、こういう四角の物で丸いものを作るにはどうしたらいいとか、自然に建築が勉強できる。す

き間を上手に入れて積むと、透明感とか、かっこよく積めるのがわかってくる。

建築に限らずクリエイティブが試行錯誤できる。積み木なら、失敗しても何度でもやり直して工夫が出来る。そのうちに積み木の子供たちから建築家が出てくることもあるのではないかな。

■積み木へのメッセージ

辰野

くずれるのはすばらしい。楽つみ木広場では、失敗してもよい。

人は人生で、どれほど失敗するかわからない。

積み木はどれほど失敗してもやりなおしが何度でもできる。失敗から教訓を学べる遊びが楽つみ木広場だと思う。

恵良

まちづくりで、自然と都市を対立的に考えてしまうが、お互いに町を作りながら、自然と人工で、生態学で、環境共生で、自然とのふれあいで、木の材料で作ったものをもっと取り入れていく。そのヒントが積み木にある。

また、楽積み木はコミュニケーションに役立つ。朝日新聞の天声人語を見て、孫に買ってやりたいという問い合わせがあったそうで、積み木により、世代を超えてコミュニケーションを円滑にすることが出来るようだ。

荻野

一人のお母さんからつみ木広場をやりたいと電話をもらい、こんな話をしました。『ひとりでやらないで、お友達を五人集めてください。そうすれば、地域の公民館を借りたり、行政のサポートがもらえるように話が出来ると。まだまだ、楽つみ木のすばらしさを知らない人がたくさんいる。でもすこしずつ仲間を増やす。七転八倒しながら木楽舎も縁あって、国の教育プログラムの認定を受けることが出来ました。仲間の力で、つむじかぜが竜巻にかわるかもしれません。』

積み木に対する社会の既成概念があるが、知らない人同士が知り合うチャンスとなり、楽つみ木運動を社会運動として取り組んでいきたい。

東京にCO₂を出しているビルがいっぱいあり、地方の森を借りて定期的に森を管理することでCO₂削減を進める活動があるが、楽つみ木は森を管理するときの間伐材から作るCO₂の貯金箱なので、この企業の社会活動に活用することは出来ないだろうか。

その企業の地元の区の幼稚園、学校に、子供たちの遊び道具として、間伐材で作った楽つみ木をいれてもらう、そうすれば、緑の森を再生できることを企業にも訴えている。

ページの先頭

会場の参加者からの発言

■楽つみ木広場への期待

○青森県弘前市から参加のご夫婦

保育支援のボランティア活動「パピークラブ」のなかで楽つみ木広場をやっています。パピークラブでは、この春から、楽つみ木広場の活動を新聞連載で紹介しています。学校教育に入っているクラスづくりや、軽度の発達障害のコミュニケーションづくりを研究して、さらに多くの方に「つみ木広場」を体験してほしいです。

○佐賀県から参加の男性

佐賀県で森林環境教育として楽つみ木広場をやっています。荻野さんとは山梨の清里で出会い、楽つみ木を知った。それから森林環境教育で佐賀県に8000個購入してもらい、保育園、幼稚園に使ってもらっています。積み木プログラムとして確立し、ツールとして活用する研究もしています。楽つみ木は佐賀県内に広がっています。自然を体で感じることができ、地球温暖化防止の意識改革にも役立ちます。

○神奈川県から参加者の男性（PTA 役員）

PTAの活動の中で、学校とお父さんをつなぐ接着剤として楽つみ木広場でやっています。私は、ケアマネージャーをしているので、積み木広場の次のテーマとして、地域の高齢者を対象に普及を進めています。

○山梨県から参加した病院看護婦さん（山梨大医学部付属病院）

病院で療養している子どもたちが積み木広場を楽しみにしています。毎回作る作品が大きくなっていて、看護婦も一緒に積んでいるが、私達も楽しみ、いやされます。

「大人の楽つみ木広場」ワークショップ 写真レポート



楽つみ木広場は積み木シャワーから始まり。



童心に戻り、慎重にバランスを確かめながら



大量の楽つみ木を前に、さて何を積もうかな



絶妙なバランスで完成した
高い高いタワー



芸術性の高さに、思わず感動



話し合い、役割分担で、
みんなの作品が出現



RAKU TUMIKI の高度な造形作品



力を合わせて、積む、積む



およそ1時間のワークショップで、
大人の作品がつながった。